

【原 著】

幼児の発達障害への理解を援助する絵本教材

山口（西岡）由稀 浅野 泰昌 瀬戸山 悠 馬場 訓子

Picture Book Materials to Support Infants to Understand Developmental Disorders Subtitle

YAMAGUCHI (NISHIOKA) Yuki, ASANO Yasumasa, SETOYAMA Yu, BABA Noriko

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

原 著

## 幼児の発達障害への理解を援助する絵本教材

山口(西岡)由稀※1 浅野泰昌※2 瀬戸山悠※3 馬場訓子※4

発達障害である自閉スペクトラム症・注意欠如多動症・学習障害は、幼児にとって難解であるが、これを取り上げる絵本は近年増加傾向にあり、幼児期からの障害理解に資する教材として考えられる。障害とその特徴的な行動について、物語を通して分かりやすく示すことができる視覚教材である絵本は、選択の幅も広く、保育現場の実態に適合した幼児の障害理解を支援する。また、障害児への支援においては、保護者・兄弟支援も重要であるが、障害理解絵本には家族の心情を描写するものも多く、保護者・兄弟に対する幼児の理解を深めることにも活用できると考えられる。一方、人的環境に関わる絵本の多様性に比べて、物的環境に関わるものやその改善について紹介されたものは少ないことが把握された。これらに関する絵本の増加が期待されると共に、実態に即した手作りの絵本教材も有効であると考えられる。

キーワード：幼児期、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、学習障害、絵本

※1 御南認定こども園

※2 倉敷市立短期大学保育学科

※3 くらしき作陽大学子ども教育学部

※4 岡山大学学術研究院教育学域

## I 自閉スペクトラム症・注意欠如多動症・学習障害を主題にした絵本リストの必要性

本研究は、幼児の障害理解を援助する教材として絵本を取り上げ、その教育的妥当性を検証するものである。第1報では、幼児にとって身近な絵本を教材として活用する有用性及び妥当性と、その指導における課題について検討した<sup>(1)</sup>。その上で、第2報では、身体障害を扱う絵本に焦点を当て、保育者が障害理解教育に活用する絵本を円滑に選択できるよう、絵本リストを作成し、それらの学びの要素や留意事項等について考察した<sup>(2)</sup>。第3報である本論では、自閉スペクトラム症・注意欠如多動症・学習障害に焦点を当て、第2報と同様に、絵本リストの作成とそれらに期待できる学びや留意事項等について考察する。

発達障害は、障害の種類によって共通する行動の特徴や困難さはあるが、一見気づかれにくい。文部科学省(2022)の『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』によれば、学校教育現場において、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒(小学校・中学校)は8.8%であった<sup>(3)</sup>。また、国立特

特殊教育研究所（2007）は、「個別的な配慮・支援・工夫を必要としている幼児」について、特定の市ではあるが全国的な調査を行った結果、79.8%の幼稚園、83.0%の保育所に在籍が認められたことを報告しており<sup>(4)</sup>、幼児教育の現場でも、園の環境や生活に適応しにくい幼児の存在が指摘されている。幼児は、著しい発達の過渡期であり、その段階で生じる不適応を早急に障害と結び付けるのは間違いであるが、その中には、発達障害に起因する幼児もいることも確かであり、集団生活に不適応を起こす幼児は、増加傾向にあると言われている。

水野ほか(2012)の発達障害に関する幼児の認識を調査した研究では、紙芝居で「保育者の指示に従わない」、「絵本を独占する」、「歌が始まるとパニックになる」という問題行動の場面を示したところ、そのような行動をとる登場人物に対して、年中児より年長児の方が、厳しい見方をする傾向があるという結果が得られている。これは、年長児になると集団生活の積み重ねの中で規範意識が培われているためであると考察されている<sup>(5)</sup>。集団を意識し、協同的な活動ができるようになる幼児期は、確かに、自分と違った行動特性のある人に対して寛容になることが難しい時期でもある。仲間関係を形成する最初の時期だからこそ、よりよい交友関係を築けるような指導が必要である。

## II 自閉スペクトラム症・注意欠如多動症・学習障害を主題にした絵本の調査

### 1 調査対象

調査対象の絵本は、本論においても第2報と同様に、①公立図書館には資料収集方針があり、蔵書は一定の基準を満たしているため信頼がおける、②作成した絵本リストで紹介する絵本は、誰でも気軽に探し求められる必要があり、一定の収蔵図書を有し利用者数の多い公立図書館は最適である、という理由から、岡山県立図書館及び岡山市立図書館が収蔵している絵本を対象として収集、分析した<sup>(6)</sup>。調査時期は、2023年11月であった。

### 2 絵本の選定と分析の手続き

絵本の選定方法と分析の手続き、絵本リスト項目についても、第2報と同様である<sup>(7)</sup>。まずは絵本ガイド等を参考にしながら障害に関する絵本の情報を幅広く収集した。その上で対象年齢、漢字や振り仮名の有無や難易度、ページ数、文章量等を判断基準とした。次に、その中で岡山市内の公立図書館に収蔵されている絵本に目を通し、障害理解教育のねらいや内容に応じて分類した。リストには、「書名」「作者」「出版社」「出版年」の他に、指導の目的に沿った絵本を選択しやすいように内容等を簡単に示した。なお、このリストは本論末尾に資料として掲載し、各項目の代表的な絵本の内容を分析することで、それらの絵本の教育効果や幼児への影響、指導における留意事項等を考察した。

ここで、本論で扱う障害の定義と特徴を示す。障害の種類は、重複することがあり、厳密に分けて考えることは難しいが、本論では、発達障害の中でも、「自閉スペクトラム症」「注意欠如多動症」「学習障害」の3つに焦点を当て論

考する。また、これより以降の文章中において、自閉スペクトラム症は「ASD」(Autism Spectrum Disorder)、注意欠如多動症は、「ADHD」(Attention deficit / Hyperactivity disorder)、学習障害は「LD」(Learning disabilities order)と記す。

#### (1) ASD の定義とその特徴

文部科学省(2022)は、『障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～』において、ASD を「3歳位までにその特徴が現れることが多く、他者との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする発達の障害であり、中枢神経系に何らかの機能不全があると推定される」<sup>(8)</sup>としている。

#### (2) ADHD の定義とその特徴

文部科学省(2022)は、ADHD を「年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力又は衝動性・多動性を特徴とする障害であり、社会的な活動や学校生活を営む上で著しい困難を示す状態である。通常12歳になる前に現れ、その状態が継続するものであるとされている。注意欠陥多動性障害の原因としては、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されている」<sup>(9)</sup>と説明している。また、ADHD は、学習障害や自閉症を併せ有する場合があります、その程度や重複の状態は様々であることから、個々の子供に応じた対応が必要であるため、求められる援助の在り方も、それによって異なる<sup>(10)</sup>。

#### (3) LD の定義とその特徴

文部科学省(2022)は、LD を「基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や環境的な要因が直接の原因となるものではない」<sup>(11)</sup>と説明した。この定義は医学的な定義とは区分されており、教育的な定義として解釈されている。

### Ⅲ ASD への理解を援助する絵本と指導の留意点

#### 1 ASD に関する基礎的な事柄を紹介する絵本

##### (1) ASD の原因

『たっちゃんぼくがきらいなのーたっちゃんはいしょ(自閉症)』(資料1-③)(以降、本文中に取り上げる絵本に、本論末尾の資料に対応した番号を書き添える。なお、資料は出版年順に絵本を一覧化しており、本文中の資料番号は前後する)では、「アンテナがぎくしゃくまわる」という表現によって、「たっちゃん」に母親や周りの人の気持ちが伝わらないことを説明している。アンテナが上手く回らない様子のイラストが描かれており、幼児にとっても分かりやすいため、妥当で適切な表現であると言える。この場面の魅力は、母親の養

育態度がASDの原因ではないことを説明している点にある。反応性愛着障害と混同されることにより、苦悩するASD児の保護者は少なくない。

### （２）感覚の過敏性

感覚の過敏もASDの特徴であると言われており、衣服や人との物理的な接触を嫌う場合があるというのは有名である。手をつなぐことを「痛い」と拒む人がいるとも言われている。その他の過敏性としては、聴覚過敏が挙げられる。他児が遊びの中で発する声が、ASD児にとっては騒音のように響く場合がある。聴覚過敏の状態を想像することは難しく、実際に経験することはできない。しかし、その気持ちを描いた絵本を見ることはできる。『ぼくはここにいる』（資料1-⑩）の一場面には、遊びの集団から離れて耳を塞いでいる主人公の姿が描かれている。

### （３）反響言語

ASDの登場人物が、反響言語を使う場面が描かれた絵本がいくつか存在する。『おいでよルイス！』（資料1-⑧）や『ふしぎなともだち』（資料1-⑫）が該当する。「ルイス、サッカーやる？」という質問に対して、「サッカーやる？」と繰り返す場面があり、そのような話し方の特徴が見て分かる。また、『ふしぎなともだち』では、主人公が転校した先の学校にいるASDの男の子「やっくん」が、反響言語を何度も繰り返し発している。それに対して、「やっくんは自閉症というしょうがいがあつて、おはなしするのが、にがてなの」という担任の先生の言葉が書かれている。主人公が、周囲の人々のやっくんと接し方を見ながら、反響言語を含めてASDへの理解を深めていく様子が描かれている。実際に、幼児がASD児と関わる際に反響言語を不思議に思ったとしても、これらの絵本による追体験があれば、「ルイスや、やっくんのような人もいる」と納得しやすい。

### （４）情動障害

情動障害[emotional disturbance]について、事典では、「障害児の精神医学的問題のなかで情動障害とよぶべき顕著な現象の1つが自閉症のパニックである。パニック(panic)は元来、恐怖、狼狽、という意味の単語だが、自閉症に関して使われる場合は、激しいかんしゃく(temper tantrum)のことをさす。不満なときや、強い恐怖を感じたときなどに突然怒り出して自傷、器物破損、他害などの行為に及ぶ」、「パニックの原因は、幼児期には大きな音や不快な音にたいする怒り、日々の生活での不満、環境の変化などがある」と解説されている<sup>(12)</sup>。その瞬間の刺激だけが、パニックを誘発するわけではない。「自分にとって不快な経験を突然思い出しパニックに陥ること」もある<sup>(13)</sup>。つまり、ASD児にとっては要因があつたとしても、周囲の人から見れば何の脈絡もなくパニックになったように感じられることがある。突然泣き出したり、怒り始めたりすることがあつた場合、何故なのかと不思議に思う幼児もいるだろう。

『たっちゃんぼくがきらいなのーたっちゃんはいへいしょう(自閉症)』（資料1-③）は、ASDの友達をもつ「ぼく」の視点から描かれ、大きな声を出して頭を叩くことを、ぼくが不思議に思う気持ちが表れている。しかし、この疑問に

対する答えは絵本の中で解説されていない。パニックの原因は不快な経験である場合が多く、人によって違うため一般化できないということが、解説されていない一因であると推察される。保育者は、その幼児の不快や不安を代弁し、周囲の幼児が知ることができるように配慮する必要がある。その際、わがままで情動を爆発させているという誤解を招かないようにしなければならない。

#### (5) 表情の固さ

先述した情動の調整とも関係しているが、ASD 児・者は感情を表面に出すことが苦手であるとも言われている。そのため、周囲の人に表情が固いといった印象を与える場合もある。それを挿絵で表現したのが『おいでよルイス!』(資料1-⑧)である。この絵本では、赤い服を着た「ルイス」以外の人物には白目と黒目が描かれており、アイコンタクト等、非言語的なやり取りができることが意図的に表現されている。一方で、ルイスの表情は、周囲の人と交流するようには描かれていない。しかし、視線で交流しないからと言って一緒に遊べないわけではなく、喜んでサッカーの仲間に加わる場面がある。違いがありながら、それを意に介さず一緒に遊んでいる姿は、理想的と言える。

#### (6) こだわりや常動行動

想像力の欠如と関連すると考えられるが、ASD 児・者は興味や活動が限られ、特定の物を強く好む傾向がある。特に、いつもと同じ順序で活動することを好む傾向もある。そのため、反復的な行動パターンを示す ASD 児は少なくない<sup>(14)</sup>。『たっちゃんぼくがきれいなの一たっちゃんはじへいしょう(自閉症)』(資料1-③)では、「たっちゃん」がお気に入りの洗面器をいつも回している様子がある。また、『ごきげんボッラはなぞ人間! ?』(資料1-①)では、「ボッラ」が、誕生日プレゼントの中身ではなく、包装紙に関心を示す様子が描かれている。関心を示す対象が自分とは違うということを知っているボッラの兄は、予め様々な手触りの紙をプレゼントとして用意している。自分とは違っていても、ASD 児の好みを理解して喜ばせようとする兄の行動が、温かく感じられる。

## 2 ASD 児・者と家族の心情を紹介する絵本

### (1) 自分とは違う世界観と同じ楽しみがあること

集団遊びが盛んになる時期になると、自ら集団に加わって遊ぼうとしない幼児がいた場合に、疑問を感じる幼児もいるだろう。『たっちゃんぼくがきれいなの一たっちゃんはじへいしょう(自閉症)』(資料1-③)は、「たっちゃんはきみとあそぼうとしないけど、けっしてきみをきらってるわけじゃない」という言葉で締め括られ、ASD 児やその家族の言葉を代弁するように描かれている。

ASD 児には、共有されにくい自分なりの世界があることを描いた絵本として、『ぼくはここにいる』(資料1-⑩)がある。この絵本には、紙飛行機に乗って飛ぶというファンタジーの要素もあり、その点で幼児が親しみを感じやすいと考えられる。紙飛行機が降り着いた場所で、友達との出会いがある。物を介して ASD 児と周囲の幼児が関わりを持つことは、現実的にあり得る。絵本の最後には、「人は人が解るのか」という議題の下、「存在をありのままに認め合お

う」という作者の意図が解説されている。

また、『いっぼんのせんとマヌエル』(資料1-⑭)は、ASD児である「マヌエル」と作家の合作であり、彼自身が主人公として登場する。ASDに起因する彼のこだわりは「線を見つけること」であり、それに基づいて絵本は一本の線を軸に構成されており、ASD児特有の認識や楽しみ方があることを示すと同時に、それを一般の読者も楽しめるように描かれている。さらにこの絵本は、ピクトグラム(絵文字)が併記されており、文を読まなくても視覚的に物語を理解でき、目で見ただけで理解しやすいASDの特性を分かりやすく示すことにも役立つ。

## (2) 優しい心をもっていること

『ふしぎなともだち』(資料1-⑫)に登場するASD児の「やっくん」は、小学校の卒業式で涙を流す担任の先生の手を握って、「うちだはなこ先生、はい、おしまい。うちだはなこ先生、はい、おしまい」と言う。十数年後、主人公が仕事で落ち込んで涙を流している時にも、同じように「はい、おしまい」と繰り返す。親しい人が泣いているという状況からして、この表現は、やっくんなどの「泣かないで」という意味だと読み取れる。人の涙に反応して、十数年経っても、誰に対しても同じ方法で励ますということは、一見すると不器用なように感じられる。しかし、そこにASD者の純真さがあるとも言える。

## (3) 本人や家族の苦悩

『たっちゃんぼくがきらいなのーたっちゃんはじへいしょう(自閉症)』(資料1-③)には、困った時や泣きたい時に甘えられない「たっちゃん」本人の不安な気持ちに関する描写があり、その場面が、青一色で構成されているのも印象的である。ASDとは、孤島を転々とするような感覚であると語られることがある。曖昧な例えであるが、「自閉症の体験世界がきわめて独特であることが高機能自閉症者の手記や自伝によってあきらかになった」<sup>(15)</sup>とも言われている。

また、障害者の家族の悩みについては、『ボッラはすごくごきげんだ!』(資料1-②)『ごきげんボッラはなぞ人間! ?』(資料1-①)で多くを知ることができる。障害に気付いて驚き不安になる場面、買い物先でボッラがいたずらをする場面、周囲の人がボッラについて噂話をする場面、非社会的で家族にとって酷な場面もあるが、どれも現実的にあり得る事柄である。絶望的な悲しみを感じながらも「ボッラはあんなにたのしそうだよ」という兄の言葉もある。作者は家族であり、障害者に身近な人が作ったという点で、非常に貴重である。

## 3 ASD児・者との関わり方を紹介する絵本

### (1) 学習方法の違い

『ボッラはすごくごきげんだ!』(資料1-②)では、療育の先生が多くいることが紹介されている。また、学校生活の中で、授業とは違った方法で学ぶことを尊重している絵本もある。『たっちゃんまってるよ』(資料1-⑤)では、1年生のみんなが教室で国語の授業を受ける中、「たっちゃん」が校庭に出て行き、業務員の先生とスチール缶やアルミ缶に触れながら、片仮名を学習する場面がある。このことから、学習方法が違っていても片仮名を学習できることが分か

る。他にも、畑や池を散歩しながら様々なことを知る様子が描かれている。

また、『おいでよルイス！』（資料1-⑧）では、授業中にサッカーをする「ルイス」らに対して、学級の女の子が不満な思いを教師にぶつける場面がある。教師は、それを笑顔で受け止め、「とくべつ？ねえ、あなたは どうおもう？」と尋ねる。そして、「とっておきの時間のためなら、きそくをやぶってもかまわない、ってこと？」という女の子の気付きがある。規範意識の芽生えが形成される幼児期には、自分勝手だと思われる行動が受け入れにくい場合が多い。しかし、これらの絵本の中では、ASD 児の自由な学習方法が許されており、個性を尊重した教育という課題を克服している。

### （2）ASD 児のペースを尊重すること

『たっちゃんまってるよ』（資料1-⑤）は、ASD 児のペースを尊重することの大切さを教えてくれる絵本である。授業中に教室を出て行く「たっちゃん」に対し、戻って来て欲しいと思う友達の思いや、無理には戻そうとはしない担任の先生の様子が、読み手に安心感を与える。自然園の探検では先頭になること、給食当番として大好きな牛乳を配ること等、たっちゃんの得意なこと、好きなことについても描かれている。それを理解して、たっちゃんに関わる学級の雰囲気は温かい絵本である。

『やっちゃんがいっく！』（資料1-④）では、小学校生活の様子が写真で紹介されている。やりたいことをひとまずできるような環境を整えること、体育の時間は先生と一緒に動き、まるで先生のように振る舞うこと等、できる限り ASD 児のペースを認めている様子が描かれている。また、水泳教室の予定が変更になったことで不安定になり、泣く様子もある。ASD 児の中には、急な予定変更が苦手な傾向がある子がいるということを知るきっかけとなる。これは、ASD 児と関わる上で重要な知識である。

### （3）二次障害の予防

『ふしぎなともだち』（資料1-⑫）では、二次障害の防止に効果的であると考えられる内容が多く取り入れられている。例えば、ASD 児の「やっくん」がパニックを起こす場面では、「みんなは、やっくんがいけないことをしたら、やさしくおしえてくれる。大声をだしているときは、おちつくまでまつ」と、理解のある関わりをしている。また、中学校で初めて接する教師が無理にやっくんの行動を制御しようとする場面では、やっくんをよく知る生徒が教師の方を慌てて止める。そして、「ぼくたちは、やっくんをむりにとめると、もっとたいへんなことになるのを、しっていた」と書かれている。主人公は、「やっくんしずかにしなさい」と、自分自身に独り言を言う姿を、副作用のない薬だと捉えている。どれも直接的な表現ではないが、二次障害について言及されていることが明らかである。他にも、図書館で「しずかにせい！」とオウム返しをして他の利用者を怒らせる場面では、「やっくんは、自分のてくびをかんでいる。ずいぶんつらいおもいをしているんだらうな」という主人公の考察がある。小学校時代から大人になるまでの関わりの中で、ASD への理解が深まっていく様子が見て取れるだけでなく、具体的な関わり方の参考にもなる。



## IV ADHD への理解を援助する絵本と指導の留意点

### 1 ADHD に関する基礎的な事柄を紹介する絵本

#### (1) 衝動性に対する誤解

衝動性の強さが原因で、乱暴な性格であると捉えられがちな ADHD の人がいる。絵本でも、周囲の友達に乱暴をするような一面が強調されていることが多い。しかし、それは、本人も自己制御が難しい状態であることを説明した絵本がある。『オチツケオチツケこうたオチツケ』（資料2-①）では、ADHD の主人公が医者診察を受けて、説明を聞く場面が描かれている。その場面で医者は、ADHD の状態を「ブレーキのききにくい車にのっているようなものなんだ」と述べている。自己制御が困難だという特徴が分かりやすく表現されている。

また、『ぼくって、ふしぎくん？』（資料2-②）では、けんかをした時に、クラスの子どもが「ひろくんは、すぐなぐるんだもん」と批判する場面がある。それに対して、「いつもひろくんが悪いのか」と教師が問い掛けることで考えられることになる。困ったことがあった時に、保育者に訴える幼児は少なくない。ADHD 児に対して、「悪い子」「怖い子」といった印象を持ってしまうと、関わりが希薄になりがちである。落ち着かず動き回ったり、意地悪をしてしまったりすることが、必ずしも本人のせいではないことが伝わることを望ましい。

#### (2) 不器用な一面があること

『ぼくって、ふしぎくん？』（資料2-②）では、ADHD の不器用な一面について少し記述がある。自分で順序を考えて何かをするのは苦手だが、一つずつ言えば大丈夫であること、走るのが好きなのに跳び箱が苦手な様子、大縄を跳ぶのは苦手でも回すのは得意であること、等が挙げられている。元気に動き回るからといって、必ずしも運動が得意なわけではなく、動きによっては難しいこともあることを考慮し、無理強いしないことを注意しなければならない。

### 2 ADHD 児・者と家族の心情を紹介する絵本

#### (1) 保護者の悩み

障害を主題にした絵本では、保護者の苦悩について描かれることがあるが、ADHD に関しては、他の障害の種類に比べ、そのような場面が多いという印象を受ける。例えば、『ぼくって、ふしぎくん？』（資料2-②）では、ADHD の主人公が、クラスの友達を転倒させてしまい、母親が謝罪する場面がある。母親は、怒りを露わにすることはないが、「おかあさんは、とほうにくれていました」という記述がある。また、『オチツケオチツケこうたオチツケ』（資料2-①）にも、母親の苦悩が描かれている。これらの描写は、保護者理解や支援につながる。

#### (2) ADHD 児・者の体験する世界

自分の意思とは無関係に注意力が散漫になり、多動になるのはどのような状態なのかについて、『オチツケオチツケこうたオチツケ』（資料2-①）では、ADHD 児の体験する世界を「はやまわしのビデオのよう」という言葉で、次々と何の脈絡もない周囲の情報が頭の中に飛び込んでくる様子を表現している。同じ体

験をすることはできないが、絵を見ることで想像を巡らせることはできる。

### (3) 虐待との関連性

虐待と発達障害が関連しやすいということが、近年になって知られるようになった。杉山(2023)は、「発達性トラウマ症、つまり発達障害と診断される子ども虐待症例が多い」<sup>(16)</sup>ことを指摘している。

怒られる経験について描いた絵本がある。例えば、『よめたよ、リトル先生』(資料2-④)では、けんかをしたことやお喋りをしたこと等で、放課後に残されることを不本意に思う主人公の気持ちが紹介されている。怒られる経験の辛さを知ることが、ADHDへの理解に繋がると考えられていることが分かる。『おこだでませんように』(資料2-③)では、怒られる機会が多い状況を体験することができる。最初は理不尽なことで怒られ、不満に思う気持ちが描かれているが、最後には母親に気持ちを理解してもらえることから、幼児が安心感を得られる展開であると言える。また、保育者や保護者が寛容な気持ちの大切さを改めて思い出すことができる絵本である。

## 3 ADHD児・者との関わり方を紹介する絵本

### (1) ありのままを認めること

『オチツケオチツケこうたオチツケ』(資料2-①)では、落ち着くことが難しい自分に対して、「ボクハワルイコナンダ」という言葉が繰り返される。注意を受けることで、主人公の自己肯定感は低下していくが、最後の場面では、周囲の人がADHDの特性を理解して、励まし、褒めてくれるようになる。「ボク、スグ、イイコニ、ナレナイケド、デモ、ボクハ、ワルイコジャ、ナインダ」と締め括られている。これは、主人公が自分自身に言い聞かせるような言葉でありながらも、読み手に対して理解を求める訴えでもありとされる。

### (2) 関わり方を工夫すること

『ぼくって、ふしぎくん?』(資料2-②)の登場人物の関わり方はよき手本となる。ADHDの主人公が落ち着かない場面では、「気にしない、気にしない」という周囲の発言がある。この場面において、「気にしない」ということは、無関心や無視とは違った有効な援助であると考えられる。また、母親がADHDの我が子を見守る場面では、「おかあさんが、ゆったりはなすと、ひろくんは、ちゃんとわかっているようです」とある。話が伝わり難いのはADHD児の責任ではなく、話し方を工夫することで伝わりやすくなることが理解されればよい。また、学校においても、教師と「かたづけっこ」「サインごっこ」をすることで椅子に座る等、集団生活の規範を守って行動できるようになる場面があり、関わり方の工夫が見られる。また、この絵本の最後にある解説は、幼児に向けた言葉で書かれており、保育者が幼児の質問に答える際の参考にもなる。

## V LDへの理解を援助する絵本と指導の留意点

### 1 LDに関する基礎的な事柄を紹介する絵本

### （１）計算や読み書きの困難さ

『算数の天才なのに計算ができない男の子のはなし』（資料3-③）には、計算が苦手な主人公が登場する。時間をかければ簡単に解ける問題も、タイマーを使って時間が制限されてしまうと、焦りが出て困難になる様子が描かれている。「フリーズしちゃう！」と、頭が雪だるまのようになる描写や、九九がエイリアンからのメッセージのように見えるといった表現もあり、ファンタジーの要素が組み込まれているのも、この絵本のよさである。

『ありがとう、フォルカーせんせい』（資料3-①）には、主に読み書きに困難さのある主人公が登場する。国語の時間に、すらすらと読む友達の姿を見て、「あの、あたまのなかは、どうなってるんだろう？」と疑問に思う描写がある。また、『よめたよ、リトル先生』（資料3-②）では、「…ぼくには字がぐにゃぐにゃまがった線にしかみえないんだ。それでどうやってよめっていうんだ！」と、直接的な症状についての言葉がある。また、主人公が読みにくさを感じている部分は、文字のフォントが変えられており、すらすらと読むのが困難である様子を多少なりとも疑似体験できるようになっている。LD児は友達と比較して、自分が劣っているように感じてしまうことがあるため、人間関係がうまくいかず、いじめられたり仲間外れにされたりといったことが起こり得るといって指摘がある<sup>(17)</sup>。読み書きや計算等、特定の事柄の学習に困難さがあるため、自責の念をもつLD児は少なくないとも言われる。このような描写は、絵本においても反映されており、友達にからかわれる場面が頻繁にある。これらの絵本を読むことで、LDの状態について、少しは想像ができると考えられる。

### （２）症状の複雑さ

『ありがとう、フォルカーせんせい』（資料3-①）では、「フォルカーせんせいは、トリシャがよめるとおもっているはず。となりの子が、よんでいるのを、あんきできたし、せんせいがよんでくれたあと、おなじことをくりかえしたから」とある。後に、「せんせいたちさえ、気づかなかったんだよ」という言葉もある。また、『算数の天才なのに計算ができない男の子のはなし』（資料3-③）の主人公も、計算は難しいが、代数の問題は解けるという複雑な症状を有している。このようにLDは、誤解されることが多く、実態を把握されにくい障害であると言える。これに対して絵本は、エピソードやそれに関わる登場人物の感情等を通して、LDの実態について具体的に分かりやすく示すことができる。

## 2 LD児・者と家族の心情を紹介する絵本

### （１）LD児の心情

LDは、学習に関する障害であり、就学後ただちに他児との相違が顕在化するため、幼児期からの早期理解が求められると言える。しかし、生活と遊びを学びの主体とする幼児にとって、学習場面が描かれた絵本は経験が乏しく、理解しにくいことが考えられる。先述の絵本に出てくる「数学」「代数」といった言葉は、幼児にとって馴染みがなく、幼児にとっては難易度が高い。これに対して、『こんなおともだちってすごいね！きおくはかんぺき！ディスレクシアの

サミー』(資料3-⑧)は、野外活動における地図(文字や図形)の読解の困難さと情景に対する抜群の記憶力など、幼児でも理解しやすい描写によって、LDの一種であるディスレクシア(読字障害)が描かれる。LDの主人公の主観で表現された物語は、LD児の心情への共感と理解を促すだろう。このように、発達過程に応じた絵本を把握し、適宜選択できることが重要である。

## (2) 周囲の人からの理解

『ありがとう、フォルカーせんせい』(資料3-①)に登場する主人公の理解者は教師であるフォルカー先生だけでなく、家族もいる。主人公の祖母のように、かけがえのない存在であることを無条件に認める人物も重要である。主人公は、祖母と会話をして抱きしめられることによって、「本なんかよめなくても、どうってことないのかも…」と考えられるようになっている。LD児の支援にその家族の協力は不可欠であることを前提とすれば、家族に対する支援も同様に極めて重要である。家族や保育者・教師等のLD児の周囲の人の肯定的な様子を描いた絵本は、多面的な理解や支援を促進するものとなる。

## 3 LD児・者との関わり方を紹介する絵本

### (1) 得意なことを称揚すること

特定の分野に困難さがあっても、他に得意なこともあるということが示されている絵本がある。『算数の天才なのに計算ができない男の子のはなし』(資料3-③)の主人公は、最終的には、数学オリンピックのメンバーに選ばれて、挑戦しようとする意欲を持つようになる。また、『ありがとう、フォルカーせんせい』(資料3-①)の主人公も、自分の描いた絵を、みんなの前で褒めてもらう場面がある。自己肯定感が低下しがちであることを考慮すれば、このような経験は欠かせない。

### (2) 興味関心に沿った学習方法

LDの学習支援に限られたことではないが、学習者の興味関心に沿った学習方法を採用することは重要である。例えば、『よめたよ、リトル先生』(資料3-②)では、読字の学習のために、島や自然に関する本が用意されている。夏休みに家族で旅行をする島での楽しい経験と結び付き、主人公の学習意欲が湧くという展開がある。本を読む楽しさを感じられるようになると、「リトル先生は、よけいなことはいわず、たすけがひつようなときだけ、そっとおしえてくれた」とある。また、『ありがとう、フォルカーせんせい』(資料3-①)でも、学習方法の工夫が見られる。適切な機会を捉えて、工夫しながら学習を促進することが大切であると分かる。

## VI 総括

ASD・ADHD・LDは、幼児にとって難解であり、その理解は小学校に就学してからでも遅くはないと考えられる。しかし、障害理解教育には、実際の障害者と関わる前の学習としての意義もある。ADHDやLDのような症状を呈する児童

の存在は、文部科学省の報告によっても明らかである。今後、このような障害に関する絵本が、読み聞かせの選択肢として増えることが期待される。

発達障害への理解と支援の必要性が高まる中、関連する絵本の出版も増加傾向にあることが把握された。各障害の多岐にわたる実態に応じた多様な絵本が出版されることは、保育現場の実態に応じた個別性・具体性のある障害理解を支援する。障害とその特徴的な行動について、エピソードを通して分かりやすく示す絵本が増加することによって、各保育現場における実態により適合した具体的事例を示すことが可能となる。また、それぞれの障害の多岐にわたる実態を提示することもできるだろう。これは、幼児の多面的な障害理解に資するものと考えられる。さらに、障害児への支援においては、保護者・兄弟支援も重要であるが、障害理解絵本には家族の心情を描写するものも多く、保護者・兄弟に対する幼児の理解を深めることにも活用できる。

一方で、人的環境に関わる絵本の多様性に比べて、物的環境に関わるものやその改善について紹介された絵本は少なかった。発達障害児・者等への配慮としては、物的環境を分かりやすく整理するというようなことも挙げられる。例えば、障害を持つ幼児が視覚支援を受けながら生活する様子を身近に見て、素朴に疑問を抱く幼児がいることも推定される。必要な支援は、それぞれに異なっているため、特定の登場人物に当てはめて描くことは難しいかもしれないが、そのような配慮が必要な場合もあることについて、物語の中で説明されている絵本があってもよいと考える。その意味では、実態に即した手作りの絵本教材も有効であると考えられる。

資料 1. ASD への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『ごきげんボッラはなぞ人間!?ビルとボッラのお話』	グニッラ・ベリイストロム／文、絵、ビヤネール多美子／訳	偕成社	1981年	ASD 児の生活 21×26／32 頁 半創作・漢字
②『ボッラはすごくごきげんだ!ビルとボッラのお話』	グニッラ・ベリイストロム／文、絵、ビヤネール多美子／訳	偕成社	1982年	ASD 児の生活 21×26／32 頁 半創作・漢字
③『たっちゃんぼくがきらいなのーたっちゃんはじへいしょう(自閉症)』	さとうとしなお／作、みやもとただお／絵	岩崎書店	1996年	ASD の原因 26×19／30 頁 創作
④『いっしょがいいな障がい絵本⑤やっちゃんがいっしょ!』	北村小夜／監修、佐藤陽一／文、坂本真典／写真	ポプラ社	2006年	ASD 児の生活 25×24／55 頁 実話・写真・漢字
⑤『たっちゃんまってるよ』	おくもとゆりこ／文、よこみちけいこ／作	アスラン書房	2008年	ASD 児との関わり 26×21／32 頁 創作・漢字
⑥『ヘンテコリン』	東田直樹／作	エスコアール	2008年	ASD 児の生活 29×22／48 頁 半創作
⑦『ツルのとぶ大地で』	こやま峰子／文、小泉るみ子／絵	女子パウロ会	2008年	ASD 児との関わり 25×19／31 頁 実話・漢字
⑧『おいでよルイス!』	レスリー・エリー／作、ポリ・ダンバー／絵、もとしたいづみ／訳	フレーベル館	2009年	ASD 児の生活 28×22／26 頁 創作・漢字
⑨『アスペルガーの心 1 わたしもパズルのひとかけ』	フワリ／作・絵	偕成社	2012年	ASD 児の生活 22×16／44 頁

幼児の発達障害への理解を援助する絵本教材

ら』 ⑩『アスペルガーの心2パニックダイジテン』	フワリ／作・絵	偕成社	2012年	半創作 ASD 児の生活 22×16／44 頁 半創作
⑪『ぼくはここにいる』	ピーター・レイノルズ／作、酒木保／訳、こやまたかこ／デザイン	小峰書店	2013年	ASD 児との関わり 20×21／31 頁 創作・漢字
⑫『ふしぎなともだち』	たじまゆきひこ／作	くもん出版	2014年	ASD 児との関わり 25×26／40 頁 半創作・漢字
⑬『アスペルガーの心3きんじょのらぶちゃん』	フワリ／作・絵	偕成社	2015年	ASD 児の生活 22×16／44 頁 半創作
⑭『いっぼんのせんとマヌエル』	マリア・ホセ・フェラーダ／文、パトリシア・メナ／絵 星野由美／訳	偕成社	2017年	ASD 児の生活 17×20／36 頁 半創作
⑮『ぼくはスーパーヒーロー アスペルガー症候群の男の子のはなし』	メラニー・ウォルシュ／作、品川裕香／訳	岩崎書店	2017年	ASD 児の生活 28×26／32 頁 半創作
⑯『ジヘーショーのパナヤん』	成沢真介／文、森千夏／絵	少年写真新聞社	2018年	ASD 児の生活 19×26／31 頁 創作
⑰『すずちゃんのおみそ自閉症スペクトラム(ASD)のすずちゃんのおてがみ』	竹山美奈子／文、三木葉苗／絵	岩崎書店	2018年	ASD 児の生活 29×25／32 頁 半創作
⑱『いっぼんのせんとマヌエル ピクニックのひ』	マリア・ホセ・フェラーダ／文、パトリシア・メナ／絵 星野由美／訳	偕成社	2020年	ASD 児の生活 17×20／36 頁 半創作
⑲『こんなおともだちってすごいね！3でんしゃはかせにおまかせ！自閉スペクトラム症のチャーリー』	トレーシー・パッキアム・アロウェイ／作、アナ・サンフェリッポ／絵、富原まさ江／訳	合同出版	2022年	ASD 児の生活 21×21／26 頁 半創作

資料2. ADHD への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『オチツケオチツケこうたオチツケ-こうたはADHD』	さとうとしなお／作、みやもとただお／絵	岩崎書店	2003年	ADHD の特性 27×20／32 頁 創作・漢字
②『いっしょがいいな障がいのお絵本⑥ぼくって、ふしぎくん？』	北村小夜／監修、嶋田泰子／文、岡本順／絵	ポプラ社	2006年	ADHD の特性 25×24／55 頁 創作・漢字
③『おこだでませんように』	くすのきしげのり／作、石井聖岳／絵	小学館	2008年	ADHD の模擬体験 21×24／32 頁 創作
④『よめたよ、リトル先生』	ダグラス・ウッド／作、ジム・パーク／絵、品川裕香／訳	岩崎書店	2010年	ADHD・LD の特性 30×25／29 頁 実話・漢字
⑤『ボクはじっとできない自分で解決法をみつけたADHDの男の子のはなし』	バーバラ・エシャム／作、マイク&カール・ゴードン／絵、品川裕香／訳	岩崎書店	2014年	ADHD の特性 22×22／32 頁 半創作
⑥『ゆめみるハッピードリーマー』	ピーター・レイノルズ／文・絵、なかがわちひろ／訳	主婦の友社	2015年	ADHD 児の生活 22×24／40 頁 半創作
⑦『こんなおともだちってすごいね！2ひらめきでなぞとき！ADHDのイジー』	トレーシー・パッキアム・アロウェイ／作、アナ・サンフェリッポ／絵、富原まさ江／訳	合同出版	2022年	ADHD 児の生活 21×21／26 頁 半創作

資料3. LD への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『ありがとう、フォルカ』	パトリシア・ボラッコ／	岩崎書店	2001年	LD の特性

一せんせい』	作，絵，香咲弥須子／訳			29×22／36 頁 実話・漢字
②『よめたよ，リトル先生』	ダグラス・ウッド／作，ジム・パーク／絵，品川裕香／訳	岩崎書店	2010 年	LD・ADHD の特性 30×25／29 頁 実話・漢字
③『算数の天才なのに計算ができない男の子のはなし』	バーバラ・エンシャム／作，マイク・ゴードン，カールゴード／絵，品川裕香／訳	岩崎書店	2013 年	LD の特性 22×22／32 頁 創作・漢字
④『ありがとう，チュウ先生』	パトリシア・ボラッコ／作，さくまゆみこ／訳	岩崎書店	2013 年	LD の特性 29×22／40 頁 実話・漢字
⑤『がらくた学級の奇跡』	パトリシア・ボラッコ／作，入江真佐子／訳	小峰書店	2016 年	LD の特性 26×20／48 頁 半創作
⑥『なまけてなんかない！ディスレクシアの男の子のはなし』	品川裕香／作，北原明日香／絵	岩崎書店	2017 年	読み書き障害の特性 22×22／32 頁 半創作
⑦『かなわね』	大橋美沙／作・絵	文芸社	2020 年	LD の特性 19×26／36 頁 半創作
⑧『こんなおともだちってすごいね！きおくはキャンペーン！ディスレクシアのサミー』	トレーシー・パッキアム・アロウェイ／作，アナ・サンフェリッポ／絵，富原まさ江／訳	合同出版	2022 年	読み書き障害の特性 21×21／26 頁 半創作

### 参考・引用文献

(1)山口（西岡）由稀，浅野泰昌，馬場訓子：「幼児期の障害理解教育における絵本の教材化と指導の課題」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』13， 373-387 頁，2023 年。

(2)浅野泰昌，山口（西岡）由稀，馬場訓子：「幼児の身体障害への理解を援助する絵本教材」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』13， 389-403 頁，2023 年。

(3)文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf)(2024 年 1 月 4 日閲覧)

(4)独立行政法人国立特殊教育総合研究所：「調査研究報告書 乳幼児期からの一貫した軽度発達障害者支援体制の構築に関する研究—乳幼児期における発見・支援システムの実態調査を中心に—」，28-71 頁，2007 年。

(5)水野智美，西鶴有沙，徳田克己「発達障害に関する幼児の認識」、『障害理解研究』14， 1-9 頁，障害理解研究会，2012 年。

(6)浅野ほか・前掲論文(2)

(7)浅野ほか・前掲論文(2)

(8)文部科学省：『障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～』，ジアース教育新社，243 頁，2022 年。

(9)文部科学省・前掲書(8)：320 頁。

(10)文部科学省・前掲書(8)：321 頁。

- (11) 文部科学省・前掲書(8) : 300 頁.  
(12) 茂木俊彦, 他 : 『特別支援教育大事典』, 旬報社, 452 頁, 2010 年.  
(13) 石崎朝世, 他 : 「広汎性発達障害(自閉症スペクトラム)」, (小野次朗/編 : 『よくわかる発達障害』), 85 頁, ミネルヴァ書房, 2007 年.  
(14) 石崎・前掲書(13) : 82 頁.  
(15) 茂木・前掲書(12) : 347 頁.  
(16) 杉山登志郎 : 「トラウマ処理を学び臨床を拓げよう」, 『小児の精神と神経』 63 (3), 211-221 頁, 2023 年.  
(17) 片岡美華 : 「学習障害者に対する教育的支援」, (大沼直樹, 他/編 : 『特別支援教育の基礎と動向[改訂版]新しい障害児教育のかたち』), 127 頁, 培風館, 2007 年.

---

Picture Book Materials to Support Infants to Understand Developmental Disorders  
Subtitle

YAMAGUCHI (NISHIOKA) Yuki\*1, ASANO Yasumasa\*2, SETOYAMA Yu\*3, BABA Noriko\*4

Autism Spectrum Disorder (ASD), Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), and Learning Disabilities (LD) are obscure for infants to understand, but picture books about these disabilities have recently increased, and are considered to be educational materials to understand these disabilities from early childhood. Picture books, that can clearly present disabilities and their characteristic behaviors through stories, offer various choices and support an understanding of disabilities in the real childcare. Also, many picture books for understanding disabilities describe the emotions of the family and can be used to deepen infants' understanding of their parents and siblings. On the other hand, the number of picture books about the environment and its improvement is small. An increase in the number of picture books on these topics is expected, and handmade picture book materials based on the real conditions would also be effective.

Keywords: Early Childhood, Autism Spectrum Disorder (ASD), Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), Learning Disabilities (LD), Picture Books

\*1 MINAN Certified Centers for Early Childhood Education and Care

\*2 Department of Early Childhood Education and Care, Kurashiki City College

\*3 Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

\*4 Faculty of Education, Okayama University

---